

欽明天皇とその時代

継体の子供である安閑、宣化、欽明天皇の死亡年と即位の時期を説明します。資料によってこれらの年がさまざまであります。と言うことは、これらの天皇の即位に関して何か問題と理由があったと思われる。その辺りを考えてみたいと思います。

- 4 6 6 この頃安閑誕生か 4 6 7 宣化誕生か (母は尾張の豪族の娘)
- 5 1 0 欽明誕生か (母は仁賢天皇皇女である手白髪皇女)
- 5 2 7 古事記では継体崩御 (4 3 歳)
- 5 3 1 継体崩御 百濟本記 元興寺縁起 上宮聖徳法王帝説
欽明即位か (欽明元年)
- 5 3 3 安閑 2 年
- 5 3 4 継体崩御 (8 2 歳) 日本書紀 安閑即位か
- 5 3 5 古事記では安閑崩御 7 0 歳
- 5 3 8 欽明 7 年 戊午の年 仏教伝来
- 5 3 9 宣化崩御 (在位 4 年) 7 3 歳
- 5 7 1 欽明崩御 3 1 年間在位 (あるいは 4 0 年)

安閑、宣化、欽明の崩御と即位の年が資料によってさまざまな説があることをどう説明したら良いのか。昭和に入ると、戦前喜田貞吉が 531 年に重大な政治危機があり、尾張の目子媛を母に持つ安閑、宣化系と仁賢天皇の皇女である手白髪皇女を母に持つ欽明系とに大和朝廷が分裂したとする 2 朝並立の考えを示した。その考えを受け継いだ林屋辰三郎は戦後、継体、欽明朝は国家形成上内乱期であったと位置づけた。それによると、531 年「辛亥の変」によって継体が死去し、蘇我氏に擁立された欽明が即位したが、それに反対した大伴氏を中心とする勢力が 534 年安閑を擁立し、安閑の死後は宣化を擁立した。しかし 539 年、宣化の死により、欽明に統一されたという。百濟本記に次のようなことが書かれている。「継体が死んだ 531 年辛亥の年に日本の天皇及び皇太子、皇子すべて崩薨りましぬ」(この話は 60 年前の雄略天皇の辛亥の年 (471 年) に雄略と皇子が亡くなったことであるとしている。安本美典)

百濟本記による、この年、天皇、皇太子、皇子が同時に亡くなったという記事をいかに考えるべきかと言う問題があるが、継体の死後、安閑・宣化・欽明へと王位が継承されていったとする古事記、日本書紀の伝えは大まかに見ると事実であると認めて良いのではないかと言う説を打ち立てた。

欽明天皇

欽明天皇の母は、仁賢天皇の皇女の手白髪皇女なので、血筋としては申し分ないが、年齢からみれば若かった。安閑、宣化天皇より 40 歳ほど年下なので、欽明の立場はかなり難しかったのではない

か。そこで自分と同じように若くて新しい氏族である蘇我氏と結んだのではないか。后妃は宣化天皇の娘、石比賣命。そのほか蘇我稲目の二人の娘を妃としている。

この時代は渡来人多く、朝鮮半島（百済、高句麗、新羅）からの朝貢があった。大伴金村の失脚（任那4県割譲問題）、任那の復興と救援、仏教公伝、蘇我氏と物部氏の争いがあった。

蘇我氏はどこから来たか

蘇我氏は、日本の古代史を語るうえで欠かせない豪族である。6世紀半ばから7世紀半ばに及ぶ約100年間にわたって蘇我氏は大和朝廷において大王以上の勢力をもっていた。蘇我氏の主導のもとで日本は中国の先進文化を取り入れて大王の権力の強化をはかって来た。しかしそのようなことは馬子や蝦夷、入鹿の時代であって、稲目の時代には蘇我氏はそれほどの権力は持てなかった。しかし稲目が蘇我氏の台頭の礎を築いたのは確かである。

蘇我氏といえば古代史における最大の氏族であり、蝦夷や入鹿が大王家に対して専横をきわめ、大化の改新で滅ぼされたという悪のイメージが強いが、六世紀初めに稲目が突然大臣として出てくるまでは歴史に登場してくることはなかった謎の多い氏族である。

蘇我稲目は二人の娘を欽明天皇の后にして、生まれた子供たち、すなわち用明、崇峻、推古を王位につかせ、権力を握った。用明の子である聖徳太子は蘇我氏の血を強く継いでいる。

仏教公伝と国際環境

古代の倭へは、古くから多くの渡来人（帰化人）が連綿として来ており、その多くは朝鮮半島の出身者であった。彼らは日本への定住にあたり、氏族としてグループ化し、氏族内の私的な信仰として仏教をもたらし、信奉する者もいたと思われる。彼らの手により仏教公伝以前から、既に仏像や経典はもたらされていたようである。522年に来朝したとされる司馬達等（止利仏師の祖父）などはその好例で、すでに大和国高市郡において本尊を安置し、「大唐の神」を礼拝していたと「扶桑略記」にある。

4世紀後半以降、高句麗、百済、新羅は互いに連携、抗争を繰り返していた。6世紀前半、即位した百済の聖明王は中国南朝梁の武帝から百済王に冊封され、当初新羅と結んで高句麗に対抗していた。だが次第に新羅の圧迫を受け、538年には都を熊津から泗泚へ移すことを与儀なくされるなど、逼迫した状況にあり、新羅に対抗するため、さかんに倭に対して援軍を要求していた。百済が倭国へ仏教を伝えたのも、倭へ先進文化を伝えることで交流を深めること、また東方伝播の実績をもって仏教に心酔していた梁武帝の歡心を買うことなど、外交を有利にするためのツールとして利用した言う側面があった。

日本への仏教伝来の具体的な年次については、古来から有力な説として552年と538年が有力とされている。これ以前より渡来人とともに私的な信仰として日本に入ってきており、さらにその後も何度かにわたって仏教を通じた公的な交流はあったと見て、公伝の年次確定にさほどの意義を見出せない論者もいる。いずれにしても、6世紀半ばに、継体天皇没後から欽明天皇の時代に百済の聖明王より伝えられたことは疑いないと思われる。

日本書紀では第29代欽明天皇の13年（西暦552年）の条に仏教が朝鮮半島の百済から伝わってきたとして次のように書かれている。「冬の10月に百済の聖明王は高官の怒唎斯致契（ぬりしち

けい)らをわが国につかわして、釈迦仏の金銅の像一体、幡や蓋(きぬがさ 身分の高い人がかざす傘)を若干、経や論(教理を述べたもの)若干をたてまつりました。別に上表して、仏教を広めることの功德をたたえて、天皇に次のように申しあげました。「仏法は、多くの法のうちで、もっともすぐれたものです」欽明天皇はおどろあがらんばかりに喜ばれました。しかし、自分ひとりでは、決めかねるとして群臣のひとりひとりにおたずねになりました。西の隣の国のたてまつった仏の顔かたちは、おごそかで、今までにまったく見なかったものだ、礼拝すべきかどうか。蘇我大臣稲目は仏教の受け入れに賛成します。

これに対し、物部尾輿たちは、仏教の受け入れに反対します。仏教の受け入れをめぐる、以後、蘇我氏と物部氏の対立が始まります。仏教の公伝の年を西暦552年ではなく538年とする説が最近では有力である。

日本書紀では552年とし、「上宮聖徳法王帝説」「元興寺縁起」では538年(宣化3、欽明7)とする説がある。上宮聖徳法王帝説には次のように記されている。

欽明天皇538年10月に百済の聖明王は、仏像、経教、あわせて僧らをはじめて日本に伝えました。天皇は勅して、蘇我稲目に授けて、仏教を興隆させました。

元興寺縁起によると、大倭の国の仏法は、欽明天皇の御世から始まります。

蘇我稲目が天皇におつかえしていた時、欽明天皇が天下をおさめられてから7年の12月に仏法が我が国に渡ってきました。

最初に経論と仏教が伝わったときに、欽明天皇はこれをどうしようかと稲目に聞いた。稲目が大陸では仏教が盛んである。だから受け入れなければならないという。それに対して物部氏はわが国には古来から八百万の神がいる。今さらなぜ蛮国の神を受け入れなければならないのか、と反対する。そこで欽明天皇が、それでは稲目だけ仏を信じよと言う。ここで稲目は初めて向原寺(むくはらでら)を建てた。

崇仏論争

ところが国中に疫病がはやり、多くの人々が死んだ。物部尾輿と中臣鎌子は我々の意見を聞かなかったからだと言って、天皇に仏像の廃棄を願い出た。天皇がそれを許可したので、仏像を難波の堀江に流し、寺を焼きはらった。すると今度は大殿(天皇の住んでいる建物)が理由もなく火災にあった。これらの記事は潤色があるばかりでなく、記事内容そのものも疑わしいとするのが今日では一般的な見方である。

欽明朝の政治事情

仏教公伝のときに天皇は仏教を受け入れなかった。しかし欽明朝の後半から敏達朝にかけて、仏教は宮廷の有力者のあいだでじわじわと広がっていった。

日本書紀によると欽明16年(555)に稲目らが吉備の児島に白猪屯倉(しらいみやけ)と呼ばれる広大な大王の直轄地を置いたと言う。欽明30年(569)にはそこの農民の男性の名簿を作り、戸別に整理した名簿という記録を整えた。これによって名簿にもとづいて成年男子から租税をとれるようになった。欽明の朝廷は、朝鮮経営のために大和と難波を結ぶ航路を整えた。この作業はおもに蘇我稲目の手で行われた。白猪屯倉の設置に先立つ欽明14年(553)稲目は難波に来る船か

ら徴収する税の制度を整えた。これによって蘇我氏が難波の津をその影響下に置いたことがわかる。

稲目は欽明朝の朝廷の財政の整備や交通路の開発に従事したのである。そしてその職務を通じて、ますます渡来系の豪族との繋がりを深めて行った。このようなことから稲目は欽明朝の政治の重要な部分を担当していたようにみえる。しかし実際にはこの時代にはまだ軍事が最も重んじられていた。だから稲目の努力は朝廷の人々からは裏方としての働き程度にしか見られなかった。欽明朝は新羅が日本の任那に対する朝廷支配に圧力をかけていた時代である。そして欽明22年（562）の任那日本府の滅亡によって、日本は朝鮮から大きく後退した。このような政権のもとでは、古くから朝廷の武門の家として知られる物部氏が重きをなすことになる。ゆえに、欽明朝に幾度も送られた朝鮮への遠征軍は、物部尾輿の主導のもとに組織されたと思われる。欽明朝は蘇我氏が政治の主導権を握った時代とはいえないのである。

蘇我稲目の時代の蘇我氏は朝廷では、物部氏に次ぐ勢力にすぎなかった。しかし、次の稲目の子の馬子は、物部氏の本家を滅ぼして朝廷における主導権を握るのである。

稲目が死んだのは570年と思われる。欽明朝は531年から571年までであるから、稲目はその間ずっと大臣で70歳くらいまで生きてと思われる。

その後、馬子と敏達天皇、推古天皇、聖徳太子の政治が始まるのである。

公表された石室内の石棺の位置図



